



HAL
open science

Ryūkyū shogo no furusa to atarashisa: Boin to shiin ni tsuite (琉球諸語の古さと新しさ : 母音と子音について)

Thomas Pellard

► **To cite this version:**

Thomas Pellard. Ryūkyū shogo no furusa to atarashisa: Boin to shiin ni tsuite (琉球諸語の古さと新しさ : 母音と子音について). 2016 spring meeting of the Society for Japanese Linguistics, Society for Japanese Linguistics, May 2016, Tokyo, Japan. <hal-01416037>

HAL Id: hal-01416037

<https://hal.science/hal-01416037>

Submitted on 10 Jan 2018

HAL is a multi-disciplinary open access archive for the deposit and dissemination of scientific research documents, whether they are published or not. The documents may come from teaching and research institutions in France or abroad, or from public or private research centers.

L'archive ouverte pluridisciplinaire HAL, est destinée au dépôt et à la diffusion de documents scientifiques de niveau recherche, publiés ou non, émanant des établissements d'enseignement et de recherche français ou étrangers, des laboratoires publics ou privés.

琉球諸語の古さと新しさ

—— 母音と子音について ——

とま べらーる
Thomas PELLARD

CNRS-CRLAO
thomas.pellard@gmail.com

1 琉球諸語と日琉祖語の母音体系

(1) 日琉祖語の母音体系

- ・ 上代日本語のみに基づいた内的再建では： $*a$, $*i$, $*u$, $*ə$ という 4 母音体系 (松本 1975, 大野 1977, Martin 1987)
- ・ 琉球諸語との比較からは： $*a$, $*i$, $*u$, $*e$, $*o$, $*ə$ という 6 母音体系を再建 (服部 1978–1979, Thorpe 1983, Miyake 2003, Pellard 2008, 2013, ペラール 2016)

	「昼 (間)」「蒜」	「馬・午」「海」	
日琉	*piru	*peru	*uma *omi
上代	ヒ _甲 ル	ヒ _甲 ル	ウマ ウミ _甲
岡前	çiru:	phi:ru	m [?] a: ?uŋ
今帰仁	p [?] iru:	p ^h iru:	m [?] a: ?umi
大神	ps:ma	piu	mma im
石垣	p ^s i:ri	piŋ	mma iŋ
与那国	ts [?] u:	çiru	mma unnaga

(2) 服部 (1978–1979) では 7 母音体系

- ・ $*ü$ を $*a$, $*i$, $*u$, $*e$, $*o$, $*ə$ に追加^{*1}
- ・ 琉球諸語と上代語のイ列乙類音の対応が動機 (「火」の例)
- ・ 以下に示すように $*ü$ の再建が不要

2 上代日本語のイ列乙類音と琉球諸語

(3) 上代特殊仮名使いのイ列乙類 (相当) 音

- ・ 2 通りの交替パターン (露出形 ~ 被覆形)

1. イ_乙 ~ ウ < *ui

- 例：ツキ_乙 (月) ~ ツクヨ_甲 (月夜)
- 例：クチ (口) ~ クツワ (轡)

2. イ_乙 ~ オ_乙 < *ai

- 例：キ_乙 (木) ~ コ_乙 ノ_乙 ハ (木葉)
- 例：オチ (落ち) ~ オト_乙 ス (落とす)
- ・ 琉球諸語では両者が区別されている

	「月」	「木」	「口」	「落ちる」
上代	ツキ _乙 ~ ツク	キ _乙 ~ コ _乙	クチ ~ クツ	オチ ~ オト _乙 ス
阿伝	tutei-	çi:	k [?] utçi	?uti-
湯湾	tsiki	k ^h i:	k [?] utçi	?utir-
今帰仁	çitçi:	ki:	kutçi:	φuti-
大神	ksks	ki:	fks	uti
西原	tsitsi	ki:	futsi	uti:
石垣	tsik ^s i	ki:	φutsi	uti-
波照間	sik ^s i	ki	φutsi	utçi-
琉球祖語	*tuki	*ke	*kuti	*[u o]te

(4) イ列乙類音のもう一つの由来： $*oi$ (Pellard 2013, ペラール 2016)

- ・ 被覆形のオ列音が甲類相当 (< $*o$) と考える例もある (例：「青 ~ 藍」)
- ・ 被覆形ウ列音の一部は日琉祖語の $*o$ に遡る (例：「黄 ~ 黄金」, 「過ぎ_乙 ~ 過ぐす」)
- ・ 琉球諸語ではオ列音と交替するイ列乙類 (相当) 音が 2 通りの対応を示す：

1. オ_乙 ~ イ_乙 :: $*e < *ai$ (例：「木」)

2. オ_甲 ~ イ_乙 :: $*i < *oi$ (例：「火」)

	「日」	「火」	「座る」	「身・実」	「木」
上代	ヒ _甲	ヒ _乙	ヰ	ミ _乙	キ _乙
湯湾	çi:	çi-	ji-	mi:	k ^h i:
長浜	p ^s i:	p ^s i-	b ^z i:	m ^z i:	ki:
石垣	p ^s i:	p ^s i:	b ^z i-	mi:	ki:
琉祖	*pi	*pi	*wi	*mi	*ke
日琉祖	*pi	*poi	*woi	*mui	*kai

^{*1} 他の観点から提唱された Frellesvig & Whitman (2008) の 7 母音体系については Pellard (2010) の批判を参照。

(5) 琉球祖語における {*i}, {*ui, *oi}, {*əi} の3項対立残存説 (パップラルド 2012, Lau 2015)

・波照間方言・竹富方言:

1. *ki > 波 si, 竹 ei
2. *kui | *koi > 波 k^si, 竹 ki
3. *kəi > 波・竹 ki

・例外(「時」と経済性の問題)

・環境(無声化)を考慮すると説明可能

1. *kəi > ki
2. *ki | *kui | *koi

> 波 k^si, 竹 ki / $\left\{ \begin{array}{l} \# \text{---} \left[\begin{array}{l} +\text{cons} \\ -\text{son} \\ -\text{voi} \end{array} \right] \\ \# \left[\begin{array}{l} +\text{cons} \\ -\text{voi} \end{array} \right] \left[\begin{array}{l} V \\ -\text{low} \end{array} \right] \text{---} \# \end{array} \right\}$

> 波 si, 竹 ei / それ以外の環境

3. 波照間のみ: 途中で *r > s / k^si ___ (「霧」を参照)

	上代	石垣	波照間	竹富	
*ki	「息」	イキ _甲	iki	isi	ici
	「昨日」	キ _甲 ノ _乙 フ	k ^s inu	sinu	cinu
	「黍」	キ _甲 ミ _甲	k ^s iŋ	siŋ	siŋ
	「肝」	キ _甲 モ _甲	k ^s imu	simu	cū:
	「衣」	キ _甲 ヌ	k ^s iŋ	sinu	ciŋ
	「先・岬」	サキ _甲	sak ^s i	sasi	səci
	「時」	ト _乙 キ _甲	tuk ^s i	tuk ^s i	tuki
	「脇」	ワキ _甲	bak ^s i	basi	bəci
*k[u o]i	「霧」	キ _乙 リ	k ^s iru	k ^s isi	ci <u>ru</u>
	「茎」	クキ _乙	ɸuk ^s i	ɸuk ^s i	ɸuki
	「月」	ツキ _乙	tsik ^s i	sik ^s i	çiki
*kəi	「木」	キ _乙	ki:	ki:	ki:

3 ワ行子音の祖形

(6) 日本語 w :: 南琉球諸語 b / # ___

- ・弱化 *b > w か強化 *w > b か
- ・北琉球諸語の一部でも w- :: b- の対応
- ・隣接していない: 古い状態の反映の可能性
- ・弱化の方が自然で頻繁に起こるという論拠
- ・*w > b のような強化はめずらしくない: ロマンズ諸語 (Bourciez 1967: 302–303), インド・アリア諸語 (Masica 1991: 202), サモエド諸語 (Sammallahti 1988), オーストロネシア諸語 (Blust 1990: 252)

	「我」	「居る」「酔う」「夫」		
中古	ワ	ヰ	エヒ	ヲヒト
阿伝	waj	jijui	ju:jujui	gut <u>u</u>
与論	wanu	bjuw	ɸujjuw	ɸutu
辺野喜	gwan	bi:ŋ	ʔuiruŋ	ʔutu
久高	wana:	gi:ŋ	gui:ŋ	gut <u>u</u>
西原	ban	bi:	bjui	butu
石垣	banu	b ^s iruŋ	bi:ŋ	budu
与那国	banu (EXCL)	bi-	biruŋ	butu

(7) 複合語: b が現れない (名嘉真 1996, Bentley 2008: 166, Pellard 2009: 354)

- ・複合語は古形を保つことが多い
- ・後部に立った時に b が現れないことも
- ・特に語彙化されて語構成が不透明となった複合語
- ・逆に透明な複合語では b が見られる
- ・b の方が新しい

	「夫」	「夫婦」(<「女-夫」)
大神	putu	mi:tu
西原	butu	mju:tu
石垣	budu	mju:tu
竹富	butu	mijutu
与那国	butu	mituda

(8) 漢語にも w :: b の対応

- ・例: 「茶碗」大神 tapaw, 西原・石垣 tcabaw, 竹富・波照間 cabaw, 与那国 sabaw
- ・語中の w が失われた後の借用と説明可能
- ・語頭だけではなく、当時のすべての w が強化

 1. w > ∅ / V ___ V
 2. 漢語の借用
 3. w > b

(9) 体系のあきま

- ・b > w という弱化説では *bu が欠如^{*2}
- ・その体系のあきまを説明できない
- ・強化説では *wu の欠如が知覚顕著性によって説明できる (Maddieson & Precoda 1992)

^{*2} 名嘉真 (1996) や Vovin (2010) は *bu も再建するが、主に下地 (1979) の資料による。しかしそれらが他の資料 (Nevskij 1922–1928, 平山 1983, かりまた 2005) とは語形が一致せず、明らかに語源を考慮に入れた書記法が使用されている。また、v < *bu 対 u < *u が再建されているのに対し、v < *u 対 u < *o を再建したい (Pellard 2009)。

(10) 北琉球諸語の b

- ・ b の分布が限られている
- ・ 辺野喜方言：u < *o の前では b が現れない
- ・ *w > b の前に *o と *wo が ?u に合流したと説明可能
- ・ 逆に *b が先に u < *o の前で失われたとは考えにくい（音声学的な説明がない）
- ・ 与論方言では *b > φ / ___ *o という変化を仮定するのも音声学の観点からは困難
- ・ 一方 *w > φ という変化は類例がある：
 - 徳之島岡前方言「夫」 wutu: ~ φutu:
 - 古アイルランド語 *w > f (Matasović 2009)

(11) 北琉球諸語の g

- ・ 北琉球諸語では w :: g / # ___ : 喜界島・沖縄島北部・久高島
- ・ 隣接していない：古い状態の反映の可能性
- ・ しかし辺野喜方言の gwa: 「豚」 < 琉祖 *uwa からは強化が語頭母音の脱落の後に起こったと推定できる：*uwa > *?uwa > *w?a: > gwa:
- ・ 喜界島の阿伝方言：*o の前のみ g
- ・ 久高方言，非広母音の前のみ g
- ・ こういう限られた分布を強化の結果と考えた方が妥当
- ・ 弱化説でも *b > w > g の強化を認めざるを得ない
- ・ 強化が不自然だという論拠と矛盾

4 ヤ行子音の祖形

(12) 日本語 j :: 与那国語 d / # ___

- ・ 弱化 *d > j か強化 *j > d か
- ・ 弱化説では *di が体系のあきまになることが説明できない
- ・ 強化説では *ji があきまになるが，知覚顕著性によって説明できる

	「山・森」「湯」「夜」		
上代	ヤマ	ユ	ヨ _甲 ル
岡前	jama:	ju:	juɾu:
今帰仁	jama:	ju:	juɾu:
平良	jama	ju:	ju ² i
石垣	jama	ju:	ju:ɾi
与那国	dama	du:	duru

(13) 複合語：d が現れないことも

- ・ da: 「家」
- ・ baja 「我が家」 (< *ba-ja 「我々-家」)
- ・ ndja 「お宅」 (< *ndi-ja 「あなた達-家」)

(14) 漢語にも j :: d という対応

- ・ 「野菜」 dasai
- ・ 「厄年」 dagudutsi
- ・ 「欲」 dugu

(15) j > d という変化の可能性

- ・ *j > d という直接な変化が可能かは疑問
- ・ しかし *j > d | j という変化は見られる：ベトナム語 (Maspero 1912: 68–69), アルタイ語 (Johanson 1998: 97), サモエド諸語とハンガリー語 (Sammallahti 1988), アルバニア語 (Fortson 2009)
- ・ *j > (d)z | (d)z | (d)ʒ もよく見られる：ロマンス諸語 (Bourciez 1967), ギリシャ語 (Fortson 2009), チュルク諸語 (Johanson 1998: 96–97), タイ諸語 (Pittayaporn 2009), オーストロネシア諸語 (Blust 1990), アサバスカ諸語 (Rice 1997)

(16) 与那国語における子音の強化

- ・ z | z > d は実際起きている：
 - 「味」 琉祖 *azi > adi
 - 「数」 琉祖 *kazu > k^hadi
 - 「風」 琉祖 *kaze > k^hadi
 - 「昨年」 琉祖 *kozo > k^hudu
 - 「掃除」 琉祖 *sauzi > sudi
- ・ つまり *j > *z という自然な変化を新たに仮定するだけで十分

(17) 文献からの傍証 (Vovin 2010: 43–44)

- ・ 『海東諸国紀』(1471) では「与那国島」(与那国語 dunaj-tc²ima) が「閩伊是麼」と表記
- ・ 中期朝鮮語：「閩伊是麼」순이시마 zjun.i sima
- ・ *j > (d)z > d の途中過程

5 琉球諸語の p 音について

- (18) 琉球諸語の多くでは語頭ハ行子音に p が対応
- ・日本語のハ行子音も <*p
 - ・琉球諸語の p 音が祖語の *p をそのまま反映していると考えるのが自然
 - ・琉球諸語の一部に見られる ϕ | f | h は二次的な派生

	「歯」	「日」	「籠」	「骨」	「踊り」
日本語	ハ	ヒ	ヘラ	ホネ	ヲドリ
佐仁	pa:	pi-	pira	puni	wuduri
小野津	pa:	pi:	pira	puni	udui
今帰仁	p ^h a:	p ^h i:	p ^h ira:	p ^h uni	wu:dui
大神	pa:	ps:	pira	puni	putuu
石垣	pa:	p ^h i:	pira	puni	buduri
与那国	ha:	tɛ ^h i:	çira	ɸuni	budi

(19) p 音新形説 (中本 2009, 2011)

- ・ *p > ϕ > p という循環変化
- ・積極的な証拠がないようである
- ・かりまた (2009) の批判も参照

(20) ϕ > p の可能性

- ・ ϕ > p という変化は類例がない (Kümmel 2007)
- ・摩擦音が既存の破裂音と合流する例のみ
- ・南琉球等の有声音の *w > b とは空気力学的な条件が異なる
- ・ ϕ > p が不自然な変化であるのに対し、w > b という変化は自然 (前述)
- ・ p を持っている方言の多くでは *w が破裂音の b に変化していない (喜界島, 奄美大島北部, 沖縄北部の諸方言)
- ・一方, 様々な強化が起こったと思われる与那国語では *w が b に変化していながらも, 破裂音の p ではなく摩擦音の h が現れている

(21) 北琉球諸語における呼気流と喉頭化

- ・強い呼気流が喉頭の緊張によって制御された結果 * ϕ が p に強音化したという仮説
- ・しかし *e | *o の前では喉頭化子音が生じない
- ・*e | *o の前では p が現れないと予測される
- ・実は p をもっている方言では p が母音と関係なく現れる (今帰仁方言等)
- ・p 音新形説が反証

6 語末鼻音

(22) 日本語 の :: 波照間 の | η / — #

- ・語末鼻音の出現状況が不明
- ・日琉祖語に遡るとい説 (村山 1981, Starostin et al. 2003)

	波照間	白帆	与那国	日本語
「目」	mi η	mi η	mi:	メ乙
「昨年」	kutsi η	kutsi η	kudu	コ乙 ズ乙
「鳩」	pato η	pato η	hatu	ハト甲
「根」	ni η	ni:	ni:	ネ
「日」	p ^s i η	pi:	tɛ ^h i:	ヒ甲
「馬」	mma η	mma	mma	ウマ
「額」	fute	fute η	t ^h ai	ヒタヒ
「茸」	naba	naba η	naba	ナバ
「煙」	kipusi	kipuɕi η	k ^h ibuntɕi	ケブリ
「粉」	ku:	ku:	k ^h u η	コ甲
「角」	sino	simu	nnu η	ツノ甲
「糠」	nuga	nuga	nuga η	ヌカ

(23) 語末鼻音が祖語に遡るとい説の問題

- ・波照間方言の他に, その姉妹方言の白帆方言と与那国語でも観察される
- ・しかしその鼻音が現れる語が一致していない
- ・4つの異なる鼻音の再建が必要だが非現実的
- ・経済性の原理から見ても問題: 波照間方言の - η が少なくとも6回 (日本語・北琉球語派
 - ・宮古語・白帆方言・その他の八重山諸方言
 - ・与那国語) も独立的に失われたことになる
- ・複合語では - η が現れないことが多い (波):
 - mi η 「目」: mi:ka η ga η 「眼鏡」
 - sik^si η 「月」: mata-sik^si 「来月」
 - mma η 「馬」: mma-nu-ka η 「鬣」

(24) Oyler (1997) の仮説

- ・形態論の再分析と類推作用
- ・波照間方言の焦点標識の =ndu の再分析
- ・与那国語の焦点標識は =du で同じように説明できない (山田他 2013, Yamada et al. 2015)

(25) かりまた (2010: 5–6) の仮説

- ・激しい呼気流と無声化による鼻音化:
 - pa: > pã: > pã: > paã > pa η
- ・しかし不規則性の問題が残る
- ・無声化が生じない語でも語末鼻音が現れる:
 - *uma > mma η 「馬」

7 まとめ

(26) 日琉祖語の母音

- ・ 6 母音体系
- ・ 服部 (1978–1979) の *ü が不要
- ・ 代わりに *oi を再建
- ・ 琉球祖語では {*i,*ui,*oi} 対 {*ai, *ai, *e, *ia, *ia} のように合流

*i	*u	*ui		
*e	*ə	*o	*ai	*oi
	*a		*ai	
			*ia	*ua

(27) 日琉祖語の子音

- ・ ワ行子音の祖形は *w
- ・ ヤ行子音の祖形は *j
- ・ ハ行子音の祖形は *p, 琉球祖語の段階でも *p
- ・ 南琉球の語末鼻音は祖語に遡らないが現段階ではその発生を説明できない

*p	*t	*s	*k
*Np	*Nt	*Ns	*Nk
*m	*n		
	*r		
*w		*j	

資料について

参考文献掲載資料の他に、湯湾・岡前・大神・西原・与那国の諸方言については発表者の調査資料も使用した。表記はすべて簡略音声表記に統一し、アクセント及び無声化に関する情報は省いた。

参考文献

- Bentley, John R. (2008) *A linguistic history of the forgotten islands: A reconstruction of the proto-language of the Southern Ryukyus*. Folkestone: Global Oriental.
- Blust, Robert (1990) Patterns of change in the Austronesian languages. In Baldi, Philip (ed.) *Linguistic change and reconstruction methodology*. Berlin: Mouton de Gruyter, 231–267.
- Bourciez, Édouard (1967) *Éléments de linguistique romane*. Paris: Klincksieck.
- Fortson, Benjamin W. IV (2009) *Indo-European language and culture: An introduction*. Chichester: Wiley-Blackwell.
- Frellesvig, Bjarke & Whitman, John (2008) Evidence for seven vowels in proto-Japanese. In Frellesvig, Bjarke & Whitman, John (eds.) *Proto-Japanese: Issues*

and prospects. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins, 15–41.

- 服部 一郎 (1978–1979) 「日本祖語について (1–22)」『月刊言語』7(1)–7(3), 7(6)–8(12).
- 平山輝男 (編) (1983) 『琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究』東京: 桜楓社.
- 平山輝男 (編) (1988) 『南琉球の方言基礎語彙』東京: 桜楓社.

Johanson, Lars (1998) The history of Turkic. In Johanson, Lars & Csató, Éva Á. (eds.) *The Turkic languages*. London; New York: Routledge, 81–125.

狩俣繁久 (2003) 「奄美大島笠利町佐仁方言の音声と語彙」環太平洋の言語成果報告書 A4-014, 大阪学院大学情報学部.

かりまたしげひさ (2005) 「沖縄県宮古島平良方言のフォネーム」『日本東洋文化論集』11: 67–113.

かりまたしげひさ (2009) 「琉球語の $\phi > p$ の可能性をかながえる: 中本謙「琉球方言のハ行子音 p 音」への問い」『沖縄文化』43(1/105): 1(78)–19(60).

かりまたしげひさ (2010) 「南琉球方言における同化と異化」『日本東洋文化論集』16: 1–38.

狩俣繁久 (2008) 「琉球八重山方言の比較歴史方言学に関する基礎的研究」科学研究費補助金 (基盤研究 C) 研究成果報告書 (平成 17 年度～平成 19 年度).

木部暢子・窪蘭晴夫・下地賀代子・ローレンス ウェイン・松森晶子・竹田晃子 (2011) 「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究: 喜界島方言調査報告書」国立国語研究所共同研究報告 11-01, 国立国語研究所.

菊千代・高橋俊三 (2005) 『与論方言辞典』東京: 武蔵野書院.

Kümmel, Martin Joachim (2007) *Konsonantenwandel: Bausteine zu einer Typologie des Lautwandels und ihre Konsequenzen für die vergleichende Rekonstruktion*. Wiesbaden: Reichert Verlag.

Lau, Tyler (2015) Reevaluating the diphthong mergers in Japonic-Ryukyuan. In *Berkeley Linguistics Society: Proceedings of the Annual Meeting* 41: 287–305.

Maddieson, Ian & Precoda, Kristin (1992) Syllable structure and phonetic models. *Phonology* 9(1): 45–60.

前新透 (2011) 『竹富方言辞典』石垣: 南山舎.

Martin, Samuel E. (1987) *The Japanese language through time*. New Haven; London: Yale University Press.

- Masica, Colin P. (1991) *The Indo-Aryan languages*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Maspero, Henri (1912) Études sur la phonétique historique de la langue annamite: Les initiales. *Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient* 12(1): 1–124.
- Matasović, Ranko (2009) *Etymological dictionary of proto-Celtic*. Leiden: Brill.
- 松本克己 (1975) 「古代日本語母音組織考：内的再建の試み」『金沢大学法文学部論集』22: 83–152.
- 宮城信勇 (2003) 『石垣方言辞典』那覇：沖縄タイムス社.
- Miyake, Marc Hideo (2003) Philological evidence for *e and *o in Pre-Old Japanese. *Diachronica* 20(1): 83–137.
- 村山七郎 (1981) 『琉球語の秘密』東京：筑摩書房.
- 名嘉真三成 (1996) 「日本祖語のワ行音」『沖縄文化研究』22: 183–235.
- 中本謙 (2009) 「琉球方言 p 音は文献以前の姿か」高梨修・阿部美菜子・中本謙・吉成直樹 (編) 『沖縄文化はどこから来たか：グスク時代という画期』東京：森話社, 191–225.
- 中本謙 (2011) 「p 音再考：琉球方言ハ行子音 p 音の素性」『日本語の研究』7(4): 1–14.
- 仲宗根政善 (1983) 『沖縄今帰仁方言辞典』東京：角川書店.
- Nevskij, Nikolai A. (1922–1928) [2005] 『宮古方言ノート複写本』平良：沖縄県平良市教育委員会. 2 巻.
- 大野晋 (1977) 「音韻の変遷」柴田武・大野晋 (編) 『岩波講座日本語 5：音韻』東京：岩波書店, 147–220.
- Oyler, Gary G. (1997) The beginning of the /N/: In search of the origin of the noun-final mora nasal in the language of Hateruma. Master's thesis, University of Hawai'i at Mānoa.
- パップラルド ジュゼッペ (2012) 「琉球方言新資料を用いた上代特殊仮名遣いの検討」『第 26 回日本音声学全国大会』東京・大東文化大学 (2012 年 9 月 29–30 日).
- Pellard, Thomas (2008) Proto-Japonic *e and *o in Eastern Old Japanese. *Cahiers de Linguistique Asie Orientale* 37(2): 133–158.
- Pellard, Thomas (2009) *Ōgami: Éléments de description d'un parler du Sud des Ryūkyū*. Ph.D. dissertation, École des hautes études en sciences sociales.
- Pellard, Thomas (2010) Review of Bjarke Frellesvig and John Whitman (2008) *Proto-Japanese: Issues and prospects*. *Cahiers de Linguistique Asie Orientale* 39(1): 95–114.
- Pellard, Thomas (2013) Ryukyuan perspectives on the proto-Japonic vowel system. In Frellesvig, Bjarke & Sells, Peter (eds.) *Japanese/Korean Linguistics 20*. Stanford: CSLI Publications, 81–96.
- ペラール トマ (2016) 「日琉祖語の分岐年代」田窪行則ジョン ホイットマン・平子達也 (編) 『琉球諸語と古代日本語：日琉祖語の再建に向けて』東京：くろしお出版.
- Pittayaporn, Pittayawat (2009) *The phonology of proto-Tai*. Ph.D. dissertation, Cornell University.
- Rice, Keren (1997) A reexamination of proto-Athabaskan *y. *Anthropological Linguistics* 39(3): 423–436.
- Sammallahti, Pekka (1988) Historical phonology of the Uralic languages, with special reference to Samoyed, Ugric, and Permic. In Sinor, Denis (ed.) *The Uralic languages: Description, history and foreign influences*. Leiden: Brill, 478–554.
- 下地一秋 (1979) 『宮古群島語辞典』那覇：下地米子.
- Starostin, Sergei, Dybo, Anna, & Mudrak, Oleg (2003) *Etymological dictionary of the Altaic languages*. Leiden; Boston: Brill. 3 volumes.
- Thorpe, Maner L. (1983) *Ryūkyūan language history*. Ph.D. dissertation, University of Southern California.
- 内間直仁・新垣公弥子 (2000) 『沖縄北部・南部方言の記述的研究』東京：風間書房.
- 上野善道 (1996) 「奄美大島佐仁方言のアクセント調査報告：名詞の部」『琉球の方言』20: 26–57.
- Vovin, Alexander (2010) *Koreo-Japonica: A critical study in the proposed language relationship*. : University of Hawai'i Press.
- 山田真寛・トマ ペラール・下地理則 (2013) 「ドゥナン (与那国) 語の簡易文法と自然談話資料」田窪行則 (編) 『琉球列島の言語と文化：その記録と継承』東京：くろしお出版, 291–324.
- Yamada, Masahiro, Pellard, Thomas, & Shimoji, Michinori (2015) Dunan grammar (Yonaguni Ryukyuan). In Heinrich, Patrick, Miyara, Shinsho, & Shimoji, Michinori (eds.) *Handbook of the Ryukyuan languages: History, structure, and use*. Berlin; Boston: De Gruyter Mouton, 449–478.